

謝 報
徳 恩

風吹けば
来るや隣の鯉幟
こいのぼり



高浜虚子の句に「風吹けば来るや隣の鯉幟」があります。垣根を越えて、自分の家の庭の上までなびびっている大きなこいのぼりが目に浮かんでくるようです。

少子化が言われて久しい今日、子が生まれた喜び、その成長を願う親心が、5月の風をはらんで隣近所の頭上に伝わってきます。

こいのぼりを揚げる風習は、武家が端午の節句に旗指し物を玄闕に並べているのを見た江戸時代の町人が、武具の代わりにこいのぼりを立てたのが始まりのようです。

子が生まれたうれしさを他人にまで知らせたい親心は、マンションのベランダからのぞく小ぶりのこいのぼりからも伺うことができます。しかし、広く世界を見渡せば、その誕生や成長を示すこいのぼりを立ててもらえる子どもたちばかりではありません。

今この地球上では、生まれた赤ちゃんの3分の1以上が出生登録をされていない、いわば公的に存在しない「顔の見えない子ども」になっているといわれています。

貧困や差別、武力紛争によって、健康な成長や教育から締め出された子どもらの現状は深刻です。

貧しい小作人の家に生まれた、ある歌人の切ない夢の覚め際を詠んだ一首があります。

少年食時のかなしみは
烙印のごときかなや
夢さめてなほも
なみだ溢れ出づ

家の貧しさがつらくないはずはありません。それでもありのままの貧しさを見てほしいと願ったのは、報われずとも額に汗して働き、足らずともつましいやりくりをする父と母の背中に貴いものを感じ

ていたからでしょう。

大人たちが背中を鏡に映し、ふと物思いに浸る「こどもの日」は、ほろ苦い子ども時代を思い出す「おとなの日」でもあります。

子どもらがこの世に生を受けたことをみんなが祝福し、元気に育ってほしいと願うこいのぼり。

この世の全ての大人が、風薫る五月の空に元気に泳ぐこいのぼりをしっかりと立ててあげねばならないと誓う日でもあります。

指宿市長 豊留悦男

